

2020. 12. 27 第四主日年末感謝礼拝

詩篇 145 : 1-21 「豊かないつくしみの思い出」

聖書

- 1 私の神王よ 私はあなたをあがめます。あなたの御名を世々限りなくほめたたえます。
- 2 日ごとにあなたをほめたたえあなたの御名を世々限りなく賛美します。
- 3 主は大なる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さは測り知ることもできません。
- 4 代は代へとあなたのみわざをほめ歌い あなたの大能のわざを告げ知らせます。
- 5 私はあなたの主権の栄光の輝き あなたの奇しいみわざを語り伝えます。
- 6 人々はあなたの恐ろしいみわざの力を告げ 私はあなたの偉大さを語ります。
- 7 人々はあなたの豊かないつくしみの思い出をあふれるばかりに語り あなたの義を高らかに歌います。
- 8 主は情け深く あわれみ深く 怒るのに遅く 恵みに富んでおられます。
- 9 主はすべてのものにいつくしみ深く そのあわれみは造られたすべてのものの上にあります。
- 10 主よ あなたが造られたすべてのものはあなたに感謝し あなたにある敬虔な者たちはあなたをほめたたえます。
- 11 彼らはあなたの王国の栄光を告げあなたの大能のわざを語ります。
- 12 こうして人の子らに 主の大能のわざと主の王国の輝かしい栄光を知らせます。
- 13 あなたの王国は 永遠にわたる王国。あなたの統治は 代々限りなく続きます。
- 14 主は倒れる者をみな支え かがんでいる者をみな起こされます。
- 15 すべての目はあなたを待ち望んでいます。あなたは 時にかなって彼らに食物を与えられます。

- 16 あなたは御手を開き 生けるものすべての願いを満たされます。
- 17 主はご自分のすべての道において正しく そのすべてのみわざにおいて恵み深い方。
- 18 主を呼び求める者すべて まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられます。
- 19 また 主を恐れる者の願いをかなえ 彼らの叫びを聞いて救われます。
- 20 すべて主を愛する者は主が守られます。しかし悪しき者はみな滅ぼされま
す。
- 21 私の口が主の誉れを語り すべて肉なる者が聖なる御名を世々限りなく
ほめたたえますように。

はじめに

新型コロナウイルスにより様々な対応を迫られて始まった2020年。世界が混乱の中に落とされた感の一年となりました。依然収束の道は見え、落ち着きを取り戻すのは来年に持ち越すことになりそうです。教会も社会の影響を受け、教会活動が制限され試行錯誤しながら歩んできました。浮足立つとまではいかなくても、何となく地に足がついていない感じが拭えません。そのような中で思い起こされたみことばは詩篇46:10でした。「やめよ。知れ。わたしこそ神。」(文語訳：汝ら静まりて、我の神たるを知れ)という短い一節です。世の喧騒に呑み込まれそうになるとき、一度立ち止まって主に信仰の目を上げるように促すみことばです。このみことばを心に留めて主に目を向けてみますと、そこには何とたくさんの恵みの足跡が残されているではありませんか。「数えてみよ、主の恵み」という賛美歌の歌詞にも通じるように、大変な中にもたくさんの主の恵みがあつたことに気づかせてくださいました。その気づきを神さまへの感謝と賛美に変えて、今年の礼拝を締め括りたいと願っています。

1. 神さまに感謝と賛美をささげる

詩篇145篇にはたくさんの神さまへの感謝と賛美のことばが並べられてい

ます。特に神さまがすべてを治めておられることへの賛美が礼拝用語として溢れています。「あなたをあげめます」「世々限りなくほめたたえます」「世々限りなく賛美します」「あなたのみわざをほめ歌い、あなたの大能のわざを告げ知らせます」「奇しいみわざを語り伝えます」「あなたの偉大さを語ります」と、表現は違って神さまの統治をほめたたえています。

私たちは、神さまをほめたたえ賛美することが一年の締め括りにふさわしいと考えますが、多くの日本人はそのようには思わないでしょう。そもそも神さまをほめたたえとか賛美するという感覚そのものを持っておられないと思います。間もなく新年を迎え、通常新年には多くの方が神社仏閣に足を向けます。そこでは願いを告げることはあっても、神仏の対象となるものをほめたたえ賛美することはないでしょう。私たち信仰者も神さまを「願い事を聞いてくださる方」として信じて祈りますが、それだけではありません。神さまは天と地を造られたお方であり、今もご自分の主権のうちにこの世界を治めておられるお方として理解しています。もちろん世界には争いが絶えず混乱を極めている地域が数多くあります。そうした現実を前に、神さまが世界を治めておられることに異を唱える人たちは多くいるでしょう。そこには人間の罪の問題が深く横たわっているのですが、人間の罪には目を向けず、「神さまがいるのになぜ…」と世の混乱の原因をすべて神さまに持って行こうとします。確かに世には争いや混乱が絶えません。しかし、もし神さまが罪深い人間を断ち滅ぼしこの世界から手を引かれたら、もう世界はとっくの昔に終わっているのではないのでしょうか。

世界云々という自分とは関係ないと思ってしまうかもしれませんが、この一年のそれぞれの歩みを振り返ってみたいのです。困難や大変な中で混乱を極めたかもしれません。もう無理ですと呟いたことが何度あったのでしょうか。それでも一年を締め括るところまで歩んで来ることができたのは、神さまの守りと助けがあったからではないのでしょうか。それゆえに私たちは神さまに感謝して、ほめたたえて締め括るのです。そうすることが当然

だと思ふのです。

2. 神さまのいつくしみとあわれみ

今年社会が置かれている状況も私たち個人の状況も、決して好ましいものではなかったとしても神さまの御手の中にあることを受け止めたいと思います。私たちが「なぜ神さまがいるのにこんなことが起こるのか」という視点から、「もし神さまがおられなかったらどうなっていたのだろうか」という視点に切り替えるなら、今起こっている現象に対する見方が変わるはずで、この詩篇は表題に「ダビデの賛歌」と記されています。ダビデは、「もし神さまがおられなかったら…」という視点で世界と自分を見たとき、そこにあるのは神さまのいつくしみとあわれみだということに気づいたのです。

それが7～9節に記されています。「人々はあなたの豊かないつくしみの思い出をあふれるばかりに語り、あなたの義を高らかに歌います。主は情け深く、あわれみ深く、怒るのに遅く、恵みに富んでおられます。主はすべてのものにいつくしみ深く、そのあわれみは造られたすべてのものの上にあります。」ダビデは神さまがどんなに自分をいつくしんでくださったのを知り、神さまの愛に深く感謝しています。何度も何度も過ちを犯す愚かな自分に対して、神さまはあわれみの限りを尽くして関わってくださいました。8節の「主は情け深く、あわれみ深く、怒るのに遅く」ということばの背後には、赦しの神さまがいるのです。私たちすべての人間は、神さまのいつくしみとあわれみ、すなわち神さまの愛と赦しの中に生かされて今日という日を歩んでいるものなのです。それを一年の締め括りに改めて思うとき、先にお話したように神さまをほめたたえ賛美することは当然のこととなるのです。

3. 恵みに富む神さまがすぐ傍に

神さまのいつくしみ（愛）とあわれみ（赦し）は尽きることがありません。それを聖書は「恵みに富む」神さまとして紹介しています。「主は…恵みに富んでおられます。」（8節）、「主は…すべてのみわざにおいて恵み深い方。」（17

節)、「主を呼び求める者すべて まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられます。」(18 節)、「主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて救われます。」(19 節)、「すべて主を愛する者は主が守られます。」(20 節) と恵みの神さまを思い起こさせてくださっています。今並べたどのことばの中にも、ともにいて守ってくださる神さまを見ることができます。

それを良く表しているのが 14 節ではないかと思います。「主は倒れる者をみな支え、かがんでいる者をみな起こされます。」というみことばの中に、神さまとはどのようなお方なのか良く表されています。社会がデジタル化する中で時代の流れがとても速く感じられ、ついて行くのが大変です。自分のことで精一杯ですから、倒れた者を支える余裕がなくなり、かがんでいる者を起こす力が残っていません。失われつつある余裕と力をくださいと神さまに祈る者ですが、人間の力には限界があります。だからこそ、直接「倒れる者を支え、かがんでいる者を起こしてくださる」神さまを求めて頂きたいと強く願うのです。私たちが求めるなら、「主は近くあられます」(18 節) と約束してくださっています。愛する皆さんのすぐ近くに神さまの助けがあることを仰ぎ見て、その方に救いの手を差し伸ばして一年を締め括りましょう。

まとめ

今日の礼拝で私たちは神さまの「豊かないつくしみの思い出をあふれるばかりに語り」(7 節) ました。私たちの心からの賛美を神さまは受け止めてくださり感謝します。この一年間、神さまのいつくしみ、あわれみ、恵みは尽きることなく私たちに注がれて来ました。今日の礼拝でそのことに感謝をさげることができました。「私の口が主の誉れを語り、すべての肉なる者が聖なる御名を世々限りなくほめたたえますように。」(21 節)。この祈りに合わせて一年を締め括ります。